SDGs達成に向けたESD・環境教育に関する考察と提言

Considerations and Recommendations on Education for Sustainable Development: Environmental Education Towards Achieving Sustainable Development Goals

（2018年３月31日受理）

池　田　満　之
Mitsuyuki Ikeda

Key words：SDGs，ESD，環境教育，学習指導要領，教育振興基本計画

抄　　録

SDGs（持続可能な開発目標）が国内的にも広がっていく中で,その達成に向けたESD（持続可能な開発のための教育)・環境教育の取組の重要性も増している。学校教育や社会教育の現場でも，学習指導要領や教育振興基本計画に基づき，ESD・環境教育に取り組む学校や公民館，NGO・NPOや地域コミュニティ組織は増えているが，その中でもSDGsを取り入れていく傾向にある。「手法」としてのESD・環境教育と，「目標」としてのSDGsを教育・学習（学修）に組み入れることで，2030年に向けた持続可能な社会づくりにおいて不可欠な「人材（人財)」の育成が飛躍的に進むことが期待される。その可能性の高さは，岡山市京山地区などの取組から見てとれる。特に，ESD・環境教育にSDGsが加わったことで，教育活動から社会づくりへの変革が，企業などの事業者を巻き込んで社会全体で動き出す潮流が生まれている。この流れを主流にしていくために，国内はもとより世界中の各地域で，地域全体でSDGs達成に向けた取組，その核としてのESD・環境教育の取組が進展していくよう，すべてのステークホルダーの理解と参画，実践を促したい。

1．は　じ　め　に

SDGs（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goalsの略称）[1]は，2015年９月の国連サミットで採択（2016年1月1日発効）された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2016年～2030年の国際目標である。日本でも，2016年５月20日に，内閣に「SDGs推進本部」を設置し，同年12月22日に決定した「SDGs実施指針」に基づき，SDGsに積極的に取り組んでいる。こうした動きは政府だけでなく，教育界や経済界などにも広がり，国内的にも主流化に向かう流れが生まれている。

SDGsの達成に向けて，ESD（持続可能な開発のための教育)・環境教育の取組の重要性も増している。幼児教育から初等中等教育といった学校教育，大学などの高等教育，公民館などの社会教育の現場でも，学習指導要領（2017年３月31日文部科学省公示）[2][3][4]や教育振興基本計画（第３期は2018年～2022年）[5]などに基づき，ESD･環境教育に取り組む学校や公民館（社会教育施設)，NGO・NPOや地域コミュニティ組織は増えているが，その中でもSDGsを取り入れていく傾向にある。

「手法」としてのESD・環境教育と，「目標」としてのSDGsを教育・学習（学修）に組み入れることで，2030年に向けた持続可能な社会づくりにおいて不可欠な「人材（人財)」の育成が飛躍的に進むことが期待される。

ESDもSDGsも,「持続可能な社会づくり」という社会（世界)変革を目指しているが,ESDにSDGsが加わったことで，教育活動から社会づくりへの変革が，企業などの事業者を巻き込んで社会全体で動き出す潮流が生まれている。本著は，こうした大きな世界（社会）の潮流であるSDGs

の達成に向けて，ESD・環境教育の今後の展望を，筆者が核となって進めている岡山市京山地区などでの取組から考察し，推進のための提言をとりまとめた。

2．SDGs

SDGsは，持続可能な世界を実現するための17のゴールと169のターゲットから構成され，地球上の「誰一人として取り残さない」ことを誓っている。SDGsのロゴを図１に，17のゴール項目を表1に示す。

図１　SDGsのロゴ（出典：国際連合広報センター）

表１　SDGsの17のゴール項目

目標	ゴール項目
1	貧困をなくそう
2	飢餓をゼロに
3	すべての人に健康と福祉を
4	質の高い教育をみんなに：ESD
5	ジェンダー平等を実現しよう
6	安全な水とトイレを世界中に
7	エネルギーをみんなに　そしてクリーンに
8	働きがいも　経済成長も
9	産業と技術革新の基盤をつくろう
10	人や国の不平等をなくそう
11	住み続けられるまちづくりを
12	つくる責任　つかう責任
13	気候変動に具体的な対策を
14	海の豊かさを守ろう
15	陸の豊かさも守ろう
16	平和と公正をすべての人に
17	パートナーシップで目標を達成しよう

（出典：国際連合広報センター）

SDGsでは，この17のゴールと169のターゲットに目が向きやすいが，大事なことは，この目標のもとになった2030年までにどんな世界にしたいのか，その世界像を共有することである。成果文章（宣言）[1]のパラ７～９に「我々のビジョン」と題して，目指す世界像が示されている。重要な点なので，本著の最後に参考資料として掲載しておいたので，参照いただきたい。

SDGsの前身である2015年を達成期限としたMDGs（ミレニアム開発目標:Millennium Development Goalsの略称）は，主に途上国を対象にしたものであったが，SDGsは途上国も先進国もすべての国が取り組むべき目標である。日本でも，前述の通り，2016年５月20日に内閣総理大臣を本部長に，すべての閣僚を構成員として内閣に推進本部を設置し，同年12月22日に実施指針を決定している。指針における８つの優先課題を表２に示す。

表２　日本のSDGs実施指針における８つの優先課題

No.	優先課題項目
1	あらゆる人々の活躍の推進
2	健康・長寿の達成
3	成長市場の創出,地域活性化,科学技術イノベーション
4	持続可能で強靭な国土と質の高いインフラの整備
5	省・再生可能エネルギー，気候変動対策，循環型社会
6	生物多様性，森林，海洋等の環境の保全
7	平和と安全・安心社会の実現
8	SDGs実施推進の体制と手段

（出典：SDGs推進本部）

SDGsが国内的にも飛躍的に広がってきた背景には，上記のSDGs推進本部の存在が大きいが，これに加えて経済界・産業界がSDGsに動き出したことも大きい。2017年11月８日，経団連は行動指針「企業行動憲章」を改定してSDGsを取り入れた。その中で，「持続可能な社会の実現をけん引する役割を担うことを明示した。極めて重要な改定」としている。社会変革には，経済分野が不可欠なだけに，SDGsで経済分野が動き出したことは大きい。

SDGsとESDの関係は，日本ユネスコ国内委員会教育小

委員会メッセージ「ESDの更なる推進に向けて」(web…http://www.esd-jpnatcom.mext.go.jp/about/message.html）がわかりやすい。そこには，教育がすべてのSDGsの基礎であるとし,図２に示す関係図が掲載されている。

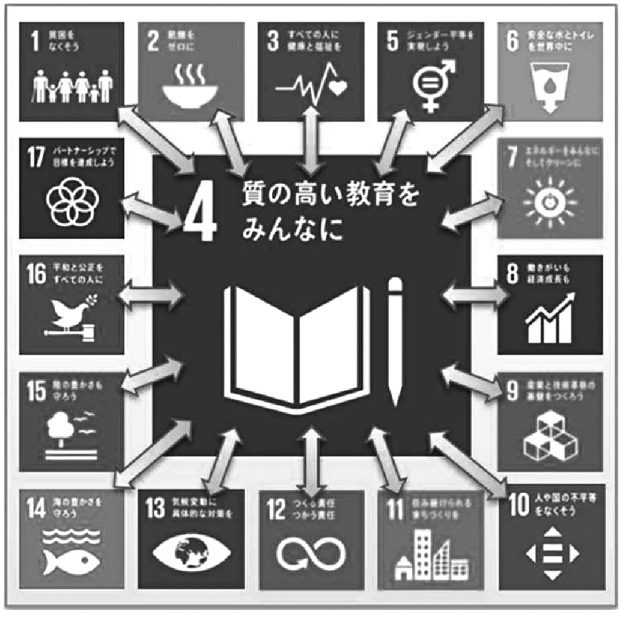

図２　SDGsにおける教育（ESD）の位置づけ案
（出典：日本ユネスコ国内委員会教育小委員会）

このメッセージには，「SDGsは，これまでESDで取り組んできた,あるいは,今後向き合うべき喫緊の課題やテーマを具体的に掲げ，その解決に向けた方向性を明確に示したものととらえることができる。」とあり，「ESDに取り組み，より一層推進することが，SDGsの達成に直接・間接に貢献するものである。」ことが書かれている。

なお，ESD・環境教育に関しては，「中国学園紀要　第16号」に掲載した「2030年を目指したESD・環境教育に関する考察と提言」などに詳しく記載した[6) 7) 8)]ので，そちらをご覧いただきたい。

3．実 践 と 考 察

本著では，著者が主として行っている岡山市京山地区でのESD・環境教育に関する実践を，SDGsの視点で取りあげ，そこから今後の指針に向けて考察した。なお，岡山市京山地区の実践の全般については，著者自身が執筆して作成している冊子「岡山市北区京山地区　持続可能な地域づくり・人づくり」(岡山市京山地区ESD推進協議会発行）[9)]や岡山市京山地区ESD推進協議会のwebページ（http://www.kc-d.net/pages/esd/）などに詳しく記載したので，そちらをご覧いただきたい。

（１）岡山市京山地区のESD・環境教育とSDGs

岡山市京山地区ESD推進協議会では，ESD・環境教育を推進するために，SDGsができる前までは表3に示す5つの地域目標を設定してESD・環境教育を実践してきた。

表３　京山地区が目指す地域目標

1	子どもも大人も共に学び合い，社会的課題に協働して取り組む地域
2	地域の絆を強め，伝統文化を伝承し，人と自然が共生する地域
3	言葉や文化の壁を越えて，同じ地域に住む外国人と共生する地域
4	障害者や高齢者も誰もが安心して暮らせる，安全で安心な住み良い地域
5	学んだことを活かせる場をつくることで，学びから持続発展し続ける地域

これに，SDGsという世界共通の目標が設定されたことから，京山地区でも地域目標を踏まえつつSDGsへの対応を検討した。その結果，2017年は表４に示すSDGsの６つの目標を重点取組項目に初期設定した。

表４　京山地区のSDGs重点取組項目（2017年初期）

目標	項　目
4	質の高い教育をみんなに：ESD
10	人や国の不平等をなくそう
11	住み続けられるまちづくりを
13	気候変動に具体的な対策を
16	平和と公正をすべての人に
17	パートナーシップで目標を達成しよう

この内容は，岡山市京山地区ESD推進協議会が毎年出しているESDの取組の総括シートに明記し，地区全体で共有している。京山地区では，2018年１月27日～28日に開催した「第13回岡山市北区京山地区ESDフェスティバ

ル」の主題の中にSDGsを加え，メインプログラム「京山ESD・SDGs対話／地域全体会議」を核に，実行委員会や大学でのESD授業などの場を使って準備段階から筆者が中心になってSDGsの学習会や検討会を重ねた。

SDGsの学習会は，国連広報センターや外務省などが出している資料や映像等をメインにして行ったが，SDGsを理解して自らの実践につなげていくには，もっと分かりやすく使いやすい実効性の高い教材開発が必要だと感じた。この点の教材開発については，多くの人や団体で取組も進んでいるが，独自の開発も今後進めていきたいと考えている。

大学でのESD授業において，学生達とESD・SDGs対話の進め方を検討した。その結果，参加者が小学生から高齢者まで多世代に及ぶのと，政・官・学・産・民が一堂に会することから，基礎的な整理を行って，論点をある程度「見える化」しておく必要があることになった。そのため，地域の情勢に関する基礎情報の整理，地域が抱えている課題の集約，地域が目指している５つの達成目標とそのための取組内容の整理，現在の達成目標や取組状況に基づく地域としてのSDGsの重点取組項目の設定,小・中・高の児童・生徒が対話で言いたいことの集約，SDGsに関する大学の行動指針の提示，SDGsとESD（環境教育を含む）に関して地域でできたこととできていないことの整理を事前段階で行い，とりまとめた結果を当日の対話用の資料として配付した。

特に小中学生にとっては，国会議員や市長や教育長や学長などといった人達と同じテーブルを囲んで対等に話し合うことはかなりのプレッシャーにもなることから，自由な発言ができる場だとしても，安心して参加できるように，すべてではないにしてもある程度は言いたいことの骨子が示されたペーパーを用意し，配付してあげることは時間効率の点からみても良かったと考えられる。2018年１月27日～28日に行った京山ESD・SDGs対話／地域全体会議には，市長，教育長，岡山市幹部職員，岡山大学学長などの小・中・高・大の各学校長，国会議員（今回は副大臣も），市会議員，岡山ESD推進協議会の会長や事務局，岡山経済同友会の代表幹事や役員，岡山ユネスコ協会の会長や役員，小・中・高・大の児童・生徒・学生代表,岡山市京山地区ESD推進協議会や各市民セクターの代表や地域住民などが一堂に会する場となった。一地区でのESD・SDGs対話に，岡山を代表する主要なキーパーソンが集結できた（写真１）のも，ESD・SDGsがいかに岡山において注目を集めているかを示している。

写真１　京山ESD・SDGs対話のメインテーブルの様子

この対話に参加した小中学校は，いずれもユネスコスクール認定校（ESDの推進校）で，ESDを通して学んできたこと，実践してきたことに基づいて発言したが，その内容は地域のゴミ問題などの環境問題から人権問題，食（地産地消），防災（ハザードマップの課題など），地縁関係の再構築，ICT技術を活用した地域の「見える化」，地区内施設の有効活用や活性化の提言など多岐に渡っているが，いずれもSDGsにつながる内容である。

例えば，SDGsの目標の２番（飢餓），８番（成長・雇用），９番（イノベーション），12番（生産・消費），17番（実施手段）などと関わりの深い「食（農業）」に関して，小学生と高校生が地産地消とそれを可能とする人材の育成，産業の振興を提言したのを受けて，農林副大臣が国の視点からの意見を，市長が地元自治体の長としての意見を話して応えるといったやりとりが行われた。

この対話の場で，何かの決議がなされるということはなかったが，参加者全員が多様な立場の人達の考えや提言を聞いて共有できたことは，今後のSDGs達成に向けてESD・環境教育を学社全体で推進していく上で大きな意義があったと考える。この京山ESDフェスでは，京山ESD・SDGs対話を挟んで,2日間に渡って数々の発表やワークショップ，体験・実演プログラムが行われ，多角的にSDGsを意識したESD・環境教育の学び合いの場がもたれた。その最後に，主たる関係者を中心に総括（ふりかえり）となる地域全体会議を行い，どういう成果があったのか,今後の方向性はどうあるべきかなどを話し合った。

後日，実行委員会によるふりかえりの場はあるが，人の記憶や思いは時間と共に薄れていくし，違うものにすり替わることも多いことを考えると，ある程度のふりかえりはその時に行うことが大事であると考える。実際，当日の最後に行ったふりかえりと，後日の実行委員会でのふりかえりを比較すると，当日に行ったふりかえりの内容の方が，より今後につながる重要な発言が多く出されていた。

2018年３月，SDGsを目標に組み入れた初年度（2017年度）のふりかえりと次年度に向けた総括シートの更新を行った。更新にあたっては,主要な関係者,多様なステークホルダーから意見をいただいた。それに基づき，京山地区のSDGs重点取組目標は，2018年度に向けて表5に示す10項目となった。

表５　京山地区のSDGs重点取組項目（2018年更新）

目標	ゴール項目
3	すべての人に健康と福祉を
4	質の高い教育をみんなに：ESD
5	ジェンダー平等を実現しよう
10	人や国の不平等をなくそう
11	住み続けられるまちづくりを
12	つくる責任　つかう責任
13	気候変動に具体的な対策を
15	陸の豊かさも守ろう
16	平和と公正をすべての人に
17	パートナーシップで目標を達成しよう

４項目が追加された理由としては，前述の日本のSDGs実施指針における８つの優先課題（表２）への対応もあるが，それ以外に外部の第３者からの指摘や，地域や社会のニーズの高まりも大きく効いている。このように，SDGsができ，世界共通，国内共通の目標，カテゴリーが明確に設定されたことで，持続可能な社会づくりの取組を地域の中でより議論，実践しやすくなったと言える。

京山地区では，前述の通り，ESDの取組総括シートを毎年作成して，PDCAサイクルをまわしてESDをスパイラル的に向上させて，持続可能な地域づくり・人づくりを地域全体で推進しているが，2017年度→2018年度版からは，ESD/SDGsの取組総括シートとし，「2017-2018年度の成果目標」の各論項目（17項目）に，それぞれSDGsのどの重点取組項目が特に関係しているのかがわかるように試行的に掲載した（表６）。

表６　京山地区の成果目標とSDGs重点取組項目の関係

区分	2017-2018年度の京山地区のESD成果目標と特に関係しているSDGs重点取組項目の目標番号
人材の育成	地域を点検して，持続性を損なっている地域課題を見つけ，解決に取り組む市民を育てる。…4,11,13,15,17
	流域というつながりの中で，体験を通して，原体験やコミュニケーション能力等を育む。…4,11,13,15,17
	学習会を通してESDに関する基礎知識の向上を図ると共に，ESDフェローを増やす。…4,11,12,17
	ESD人材育成カリキュラムを導入し，ESDコーディネーター的役割を担える人材を育てる。…4,17
	コーディネーター的役割を担ってもらいたい人が学び合える場を作ることで，担い手を育成する。…4,17
	地区全体で取り組むESDフェスティバルを開催することで，ESDの認知・理解を広める。…4,17
	HPの充実と広報紙等の発行やESDコーナー設置により，ESDの認知・理解を広める。…4,17
	映画を通してESDの普及・啓発を進める。…4,17
	劇を通してESDの普及・啓発を進める。…4,17
地域づくり	子どもも大人も活動を通して学び合い，地域の絆を強め，伝統文化を伝承する場をつくる。…4,11,17
	都市と農村の交流を通して，持続可能な地域づくりに中山間地と都市部が連携して取り組む。…4,10,11,17
	海外CLC※との連携や外国人との交流の場づくりを通して，国際理解と多文化共生を進める。…4,10,11,16,17
	障害者や高齢者も誰もが安心して暮らせる地区になるための学びの場をつくる。…3,4,5,10,11,12,16,17
	自然と人とが共生する持続可能な地域づくりを具現化する。…3,4,5,10,11,12,13,15,16,17
仕組みづくり	地域全体でESDを継続的に組織だって推進していくことができる体制と仕組みを確立させる。…17
	各セクターのESD担当者などが，ESDに関して話し合える場を確立する。…17
	自主財源づくりのため，オリジナルグッズの開発やコミュニティビジネスに取り組む。…11,12,17

※CLC…Community Learning Centre(コミュニティ学習センター)の略。

（２）事例からの考察

前述の京山ESD・SDGs対話の場で，市長は持続可能なまちづくりに関して，「どんなまちになると楽しいのか，安らぐのか，いろいろな視点で政策を打ち出していきたい」と話し,「楽しさ」と「安らぎ」を一例の形ではあったがキーワードとして挙げた。SDGsが目指す持続可能な世界（社会）については，前述の通り，2015年９月の国連サミットで採択された成果文章（宣言）[1)]のパラ７～９に目指す世界像が示されているが,その根底にも「楽しさ」と「安らぎ」があると考える。

同じ対話の場で，教育長は「温かい国際人になってほしい」「友達やふるさとを大事にできる人になってほしい」と話し，「思いやりの心」の大切さを強く示唆した。合わせて，アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の重要性を挙げたが，これらは学習指導要領が目指す「社会に開かれた教育課程」などとも通じており，SDGs達成に向けたESD・環境教育の推進においても不可欠な大事な観点と考える。

京山地区での取組を，SDGsの進捗（達成）状況から見ると，表７に示す点が特徴的な点として挙げられる。

表７　京山地区のSDGs進捗状況（2017年度，抜粋）

内　容	進捗度
【SDGsの目標17関係】地域でESD・SDGsを進めていく仕組み（岡山市京山地区ESD推進協議会等）をつくる。	80%
【SDGsの目標11関係等】ESD・環境教育から持続可能なまちづくりの取組の先行事例（観音寺用水「緑と水の道」）をつくる。	80%
【SDGsの目標4,17関係等】ESDフェロー（ESD・SDGs推進員）を地区人口数の20%相当にあたる5000人にする。	66%
【SDGsの目標4，17関係等】「誰も取り残さない社会」づくりのため，ESDセンサス（実態把握の全体調査）を実施する。	30%
【SDGsの目標11，17関係等】ESD・SDGsと観光産業等を結び付ける「ESD・SDGsツーリズム」等を地域で事業化する。	20%

表７に示す「進捗度」は，実態を総合的に鑑みて推定される度合いを数値で示している。京山地区は，1990年代から環境教育を，2003年からESDを地域で取り組み，ESD・環境教育を地域ぐるみで10年以上に渡り先駆的に推進してきたことから，SDGsの目標17（実施手段）についての進捗度は80%とかなり高い。その核となる岡山市京山地区ESD推進協議会の構成図を図３に示す。

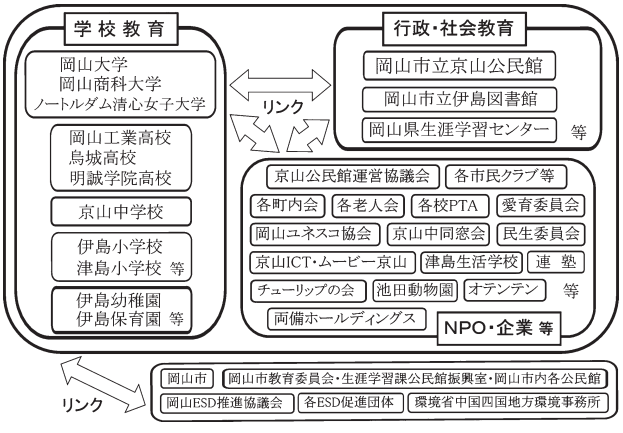

図３　岡山市京山地区ESD推進協議会の構成図

SDGsは社会全体の変革を目指していることから，地域全体を巻き込む必要がある。京山地区の本協議会は，地域全体での推進のために組織化した構成になっており，概ね80%を網羅する段階に至っている。この協議会をもとに進められた持続可能なまちづくりの取組の先行事例である観音寺用水「緑と水の道」は，2015年１月には国土交通省より「手づくり郷土賞」を受賞し，2018年１月には岡山市より「身近な生きものの里」の認定を受けるなど，SDGsの目標11（持続可能な都市）の取組の先行事例として進捗率は80%に達している。

SDGsは，持続可能な社会の実現を目指した具体的な目標を提示してはいるが，これを各地域で効果的に実践していく上では，京山地区のような地域全体に影響する仕組みを整えることと，その仕組みを活かして具体的な目に見える成果を出すことが望ましいと考える。

仕組みづくりがかなりのレベルで確立できている京山地区であっても,ESD・SDGs推進員にあたる「ESDフェロー」を地区人口数の20%相当にあたる数まで育成することは容易ではない現実がある。これは，ESD・SDGsが価値あるものとわかっても，自分自身の生活の中での緊急性や

優先度が必ずしも高くない人が多く，より深く踏み込みきれない人が多いことを示している。この点を改善していくためにも，地域全体の細やかな実態把握が望まれるが,京山地区での実態把握はまだ一部でしか行えてなく，地域全体での細やかな実態調査の実施までは至れていない。これは，京山地区には住民登録している人だけでも25000人，世帯数で12000世帯に及んでおり，しかも公務員官舎なども多くあり流動人口がとても大きい上に，高校や大学，県総合グラウンドや動物園など，地区外からも大勢の人が地区内やってくるという地域性も大きく関わっている。個人情報保護法などもあって，地域の中での細やかな情報の取得がとりにくくなっていることも影響している。その結果，部分的，断片的な収集情報をもとに検討がなされるため，SDGsが目指す「誰一人として取り残さない」ための細やかな検討がやりきれていない。こうした点への対処は今後の課題と言える。

SDGsの達成に向けて，地域全体で取組を進めるためにも，地域としてそのために使える財源の確保が必要不可欠である。いくらかは国や地方自治体の補助金などで補えるかもしれないが，それをいつまでもあてにしたのでは持続可能なものにはならない。このため，自ら独自資金を創り出すコミュニティビジネスやソーシャルビジネス，企業と地域のコラボレーションなどに取り組むことが求められる。公金頼りではすまないのは，ESD・環境教育といった教育関係も例外ではない。京山地区では，そのために「ESD・SDGsツーリズム」を核とした取組を始めている。まだ下準備段階のレベルではあるが，SDGsは企業・事業者セクターが積極的に加わってくる傾向にあるので，SDGsが今後広まっていけば，地域での資金作りもやりやすくなるのではないかと考えられる。

4．今後に向けての提言

SDGs達成に向けたESD・環境教育に関して，ここでは以下の２つの観点から今後に向けた提言を示す。

（1）達成度を「見える化」する

ESD・環境教育は「手法」のため，それ自体で達成度を示すのは難しいが，SDGsは「目標」なので2030年までの達成を目指して，総論ならびに各論において進捗状況に応じて達成度を示していくことが望まれる。もっとも，SDGsの幅の広さと各論が複雑に絡み合っていることなどを考えると，何を尺度にどう達成度を測っていくかが重要になる。この点はまだ今後の課題ではあるが，考え方としては，「国連ESDの10年」（2005年～2014年）に関係して2005年度に前述の京山地区で筆者が主任技術者となって行った「地球温暖化対策国民運動に係る地域啓発事業（岡山県岡山市京山地区）」[10]の「京山チャレンジ」の取組が参考になる。SDGsの目標13（気候変動）に対応するものである。気候変動問題の原因である地球温暖化対策のための二酸化炭素の削減について，当時の京都議定書で定められた日本の削減目標を達成するために，国民１人１人が日々においていくら削減する必要があるかを数値で示す。その上で，家庭で簡単にできることを10項目設定する。なお，項目の設定にあたっては，10項目すべてを実践すれば概ね国民１人１人が１日あたりに削減しないといけない国際公約上での値になるように設定する。各自が10日実践して記録するチャレンジシート（図４に記入例サンプルを示す）を作成し，これを配って，地域みんなで実践する。

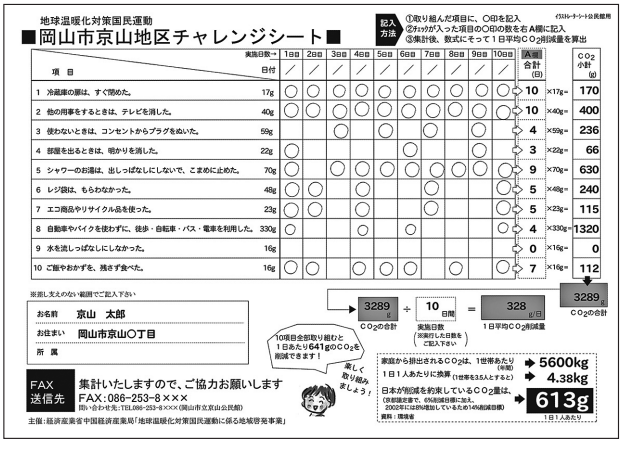

図４　京山地区チャレンジシートの記入例サンプル[10]

このチャレンジシートを使って各自が実践することで，自分の日常のどういう実践がどれくらい地球温暖化防止のための責務を果たしているかが「見える化」されるので，達成感と共にもっと頑張ろうという意欲の高まりや,社会の中での連帯感を感じることができる。また，チャレンジシートを回収して地域全体で集計すれば，自分達の地域がどれくらい地球市民としての責務を地域として達成できているかがわかり,地域全体でのやる気（モ

チベーション）を高める刺激策（インセンティブ）としても有効に役立つ。さらに，項目ごとに集計すれば，当該地域においてどの項目が達成しやすく，どの項目が達成しにくいかもはっきりする（図５）ので，地域として次に何を考え，何をすべきかが明確になり，持続可能な社会の実現に向かって継続スパイラル的に進展していくことができる。SDGs達成に向けたESD・環境教育の取組を進める上での有効な展開手法の１つではないかと考える。

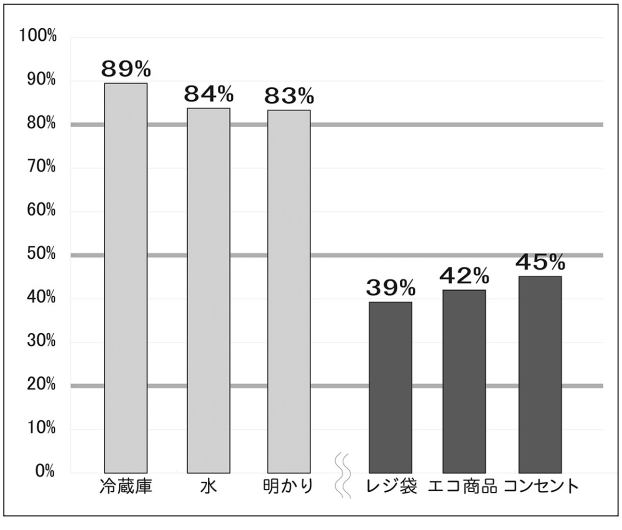

図５　削減項目ごとの達成率（上位・下位３位）[10)]

（２）各自の目標等の中にSDGsの達成を位置づける

2017年12月，第１回「ジャパンSDGsアワード」で特別賞に選ばれた岡山大学は，SDGsに関する大学としての行動指針を決定している。その意義を表８に掲載する。

表８　SDGsに関する岡山大学の行動指針を示す意義

1	人類共通の今日的課題であるSDGsへ貢献することは，岡山大学の理念である「高度な知の創成と的確な知の継承」のもと，岡山大学の目的である「人類社会の持続的進化のための新たなパラダイム構築」に資するものである。
2	ユネスコチェアを持ちESDを推進してきた岡山大学には，岡山地域や国際社会と一体となってSDGsを推進していく素地と責任がある。
3	SDGsを社会との共通言語として教育研究並びに社会貢献活動を行っていく。
4	SDGsの達成に貢献することで，課題解決力に秀でた人材を育成する。

（出典：岡山大学ｗｅｂページ）

岡山大学は，表８に示すように，その理念・目的のもとでSDGsの達成に貢献する活動に取り組み，持続可能な社会の実現をけん引していくことを公言している。このことは，前述の「京山ESD･SDGs対話」（2018年１月27日）の場においても，岡山大学学長が明示した資料を配付して話している。

SDGsを位置づけるという点では，筆者が現在運営委員長を務めている「岡山ESD推進協議会」の「平成30年度岡山ESDプロジェクト活動支援助成金　助成団体募集要項」の中にも，審査項目の考え方の1つに「SDGsの17の目標のうち，どの目標と関連するかの説明がなされているか」が明示されているように，ESDに取り組む団体にSDGsを取り入れて考えるように促す中間支援団体も出てきている。

このように，各組織が自分達の理念・目的・目標・行動指針等の中にSDGsやESDを明確に明示することで，使命感をもって組織全体で連携してSDGsの達成に向けて動き出すことができる。こうした動きが社会を構成するマルチステークホルダー全体に広がっていくことが望まれる。

５．お　わ　り　に

2018年３月に行われた岡山県立高等学校の英語の入試問題に，SDGsが取りあげられた。SDGsを明示した入試問題はまだ全体的には少ないが，SDGsという言葉は使ってなくても内容的にSDGsに踏み込んでいる入試問題は，日能研が出している「SDGs（世界の未来を変えるための17の目標）中学入試問題から見る2018年の変化」などの資料からも，全体的に増えてきていると見られる。前述の学習指導要領[2) 3) 4)]や教育振興基本計画[5)]などの動向からも，SDGsを教育の中に取り入れる傾向はより強まっていくものと考えられる。アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）や「社会に開かれた教育課程」など，学校と地域との結びつきも深まっていく中で，SDGsの達成を共通の目標としていくところも増えていくものと考えられる。

今後は益々「手法」としてのESD･環境教育と，「目標」としてのSDGsを教育･学習（学修）に組み入れることで，2030年に向けた持続可能な社会づくりにおいて不可欠な

「人材（人財）」の育成が飛躍的に進むことが期待される。特に，教育学の大学院（修士課程）などで行われるプロジェクト基盤学修（Project Based Learning：PBL）は，SDGsを明確に位置づけて取り組んだ方がやりやすいように考える。こうしたSDGsを明確に打ち出して教育に取り組むことは，高等教育だけでなく，幼児教育から初等中等教育においても同様に望まれる。

また，ESD・環境教育にSDGsが加わったことで，前述したように，教育活動から社会づくりへの変革が，企業などの事業者を巻き込んで社会全体で動き出す潮流が生まれている。経団連が行動指針「企業行動憲章」にSDGsを取り入れた改定をしたことも大きいが，それだけでなく，各地の経済同友会といった地域の経済団体の中にも，自分達の中期計画などにSDGsを取り入れる動きが出てきている。経済が動けば社会も動くだけに，この動きには大きな意義がある。

こうした流れを全体の主流にしていくために，国内はもとより世界中の各地域で，地域全体でSDGs達成に向けた取組，その核としてのESD・環境教育の取組が進展していくよう，すべてのステークホルダーの理解と参画，実践を促したい。

〈参　考　文　献〉

１）外務省：持続可能な開発のための2030アジェンダ（仮訳）（2015）
２）文部科学省：「幼稚園教育要領」（2017）
３）文部科学省：「小学校学習指導要領」（2017）
４）文部科学省：「中学校学習指導要領」（2017）
５）中央教育審議会：「第３期教育振興基本計画について（答申）」（2018）
６）池田満之：2030年を目指したESD・環境教育の将来目標に関する考察と提言.「中国学園紀要　第16号」，中国学園（2017）pp. 221-230.
７）池田満之：野外でのESD・環境教育活動が子どもに与える教育効果と配慮事項についての考察.「中国学園大学子ども学部教職課程研究論文集　創刊号」，中国学園（2017）pp. 7-17.
８）池田満之：大学におけるESD講義の学習効果について－ESDによる「人材育成論」授業から－.「ノートルダム清心女子大学紀要　人間生活学・児童学・食品栄養学編　第42巻　第１号（通巻63号）」，ノートルダム清心女子大学（2018）pp. 1-8.
９）岡山市京山地区ESD推進協議会：岡山市京山地区持続可能な地域づくり・人づくり（2018）
10）経済産業省中国経済産業局：「地球温暖化対策国民運動に係る地域啓発事業（岡山県岡山市京山地区）：あなたの町でも始めよう地球温暖化対策（京山チャレンジレポート）」（2005）

〈参　考　資　料〉

（１）2030年に向けた「目指すべき世界像」

2015年９月の国連サミットで採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の成果文章（宣言）[1]のパラ７～９に，以下の通り示されている（抜粋）。

７．我々は，すべての人生が栄える，貧困，飢餓，病気 及び 欠乏から自由な世界を思い描く。我々は，恐怖と暴力から自由な世界を思い描く。すべての人が読み書きでる世界。すべてレベルにおいて質の高い教育，保健医療及び社会保護に公平かつ普遍的にアクセスできる世界。身体的，精神的，社会的福祉が保障される世界。安全な飲料水と衛生に関する人権を再確認し，衛生状態が改善している世界。十分で，安全で，購入可能，また，栄養のある食料がある世界。住居が安全，強靭（レジリエント）かつ持続可能である世界。そして安価な，信頼でき，持続可能なエネルギーに誰もがアクセスできる世界。

８．我々は，人権，人の尊厳，法の支配，正義，平等及び差別のないことに対して普遍的な尊重がなされる世界を思い描く。人種，民族及び文化的多様性に対して尊重がなされる世界。人間の潜在力を完全に実現し，繁栄を共有することに資することができる平等な機会が与えられる世界。子供たちに投資し，すべての子供が暴力及び搾取から解放される世界。すべての女性と女児が完全なジェンダー平等を享受し，その能力強化を阻む法的，社会的，経済的な障害が取り除かれる世界。そして，最も脆弱な人々のニーズが満たされる，公正で，衡平で，寛容で，開かれており，社会的に包

摂的な世界。

9．我々は，すべての国が持続的で，包摂的で，持続可能な経済成長と働きがいのある人間らしい仕事を享受できる世界を思い描く。消費と生産パターン，そして空気，土地，河川，湖，帯水層，海洋といったすべての天然資源の利用が持続可能である世界。民主主義，グッド・ガバナンス，法の支配，そしてまたそれらを可能にする国内・国際環境が，持続的で包摂的な経済成長，社会開発，環境保護及び貧困・飢餓撲滅を含めた,持続可能な開発にとってきわめて重要である世界。技術開発とその応用が気候変動に配慮しており，生物多様性を尊重し，強靭（レジリエント）なものである世界。人類が自然と調和し，野生動植物その他の種が保護される世界。

（２）SDGsの目標4の4.7に明記されたESD関係項目

SDGsの目標４（すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し，生涯学習の機会を促進する）の4.7に明記されたESD関係項目を以下に示す。

4.7　2030年までに，持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル，人権，男女の平等，平和及び非暴力的文化の推進，グローバル・シチズンシップ，文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して，全ての学習者が，持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。